漢の死者はハッピーだった

土屋　昌明

姜生著／三浦國雄・田訪監訳
漢帝国の遺産
道教の勃興

A5判　708頁
東方書店
［本体 8,000円＋税］

本書の原題は『漢帝国之遺産――漢鬼考』という。実はこの副題にいう「漢鬼」が本書のキーワードである。これについて、監訳者である三浦國雄氏があとがきで紹介する話がおもしろい。三浦氏は、著者の姜生氏の招きで成都に長期滞在していた。姜生氏は、公の席でしばしば「漢鬼（漢代の死者）は宋鬼などに比べてはるかに幸せだった」と発言した。この発言を聞いた三浦氏は、「「宋鬼」が「不幸」なのは、もしかして朱子学が鬼神を「気」に還元してしまったことを指すのかなと思ったものの、「漢鬼」がなぜハッピーだったのか分から」なかったという。そんな疑問が三浦氏のスタートにあり、「本書を皆さんと訳し終え、ようやく氏［姜生］の真意が理解できたように思う」と書いておられる。

本書を一読しただけの私は、「漢鬼」がハッピーな理由を少しわかってきた感じがしている程度である。それは、姜生氏の議論がわかりにくいという側面もあるかもしれない。その原因はおそらく、論証資料としての画像の多用、解釈抜きの古典籍の原文の多用、それに彼一流の饒舌な文体、そして彼の提示する発想の転換に不慣れなこと、などにあるのだろう。その点、訳者（鈴木舞・矢島明希子・富田美智江・名和敏光・森和・宮島和也・内山直樹の諸氏）の学恩にあずかって、六五〇ページを超える彼の饒舌な文章を平易な日本語で読むことができるのは僥倖である。大量にある引用古典籍の原文も、丁寧な現代日本語に翻訳されている。これは望外の喜びであり、訳者の苦労がしのばれる。私は、姜生氏が来日したときに話を聞いたり通訳したりしたことがあるが、まるで一知半解だった。原書もなかなかに難物で、簡単に手が伸びな

かった。これでやっと彼の提示する発想の転換が私にも理解できた。まずは訳者の方々のご苦労に感謝の意を表したい。

本書の内容と特長を紹介するのが本稿の目的である。そのキーワードの「漢鬼」からすれば、本書は漢代の死生観ないし宗教観に関する議論だとわかる。「鬼」は、言うまでもなく日本でいう「鬼」ではなく、死者のことである。「漢鬼」があらわしているのは、死という人生の終結だけではなく、不死の「仙」への変容の開始だという。だから漢人にとって「鬼」は、自己の生命の価値であり意味の主体である。そして「鬼」から「仙」となるのは、「終極存在へと方向づけられた生命の抜擢過程」である。要するに、漢人にとって死後の世界は、生命への復帰であり、生前に理想とした神々や聖賢とともに暮らす場所なのである。だから、そこは新しい希望と生気に満ちており、ハッピーなのである。

「宋鬼」を例示するとややこしくなるので、魏晋の人々と比較するとわかりやすい。魏晋の人々は仏教や神仙道教のもとで暮らしていた。魏晋の道教では、「仙」となるには修行しなければならない。仏教では、地下の冥府は道を失った者に懲罰を加える場所（地獄）とされた。この比較により、漢と魏晋の死後が比べようもないほど相違することが理解できる。

漢鬼の思想では、人は死後に「仙」となり、過去に存在して今は「仙」となった神仙の隊伍に選抜される。その神仙とは、儒家的な人生を生き抜いた人々、つまり孝子・節女・烈士・忠臣・明主などである。そのためには、生前に聖人が書いた徳目を実践しておかなければならない。つまり漢鬼の思想は、現世での儒家道徳の実践が死後の神仙化と結び付けられているのである。

死後に「鬼」から「仙」になるとすれば、それはどんな過程なのか。その過程は一種の宗教儀礼であり、肉体の変容としての「尸解」である。「尸解」と聞くと、のちの道教で昇仙する者がみずからの肉体を服や靴などに託して残すことを想起するが、漢鬼の尸解はそうではなく、肉体への操作と変容であり、厳密な順次を備えていた。馬王堆一号墓の四重棺とT型帛画はその表象である。「尸解」をもたらすのが「漢墓」であり、それゆえ「漢墓」は単純な墓葬の場ではなく「煉形の宮」であった。つまり漢代の墓は、死者が新たな生命へと抜け出る儀礼装置であり、墓の建築や埋葬品は、その装置のパーツなのである。

したがって、漢代の墓の建築や墓内の画像などに携わった人々は、ただの画家・職人ではなく、儒家の思想と信仰を持った「儒生」（儒家の徒）だった。彼らは現世と死後とを連続

した全体とみなし、死後世界で夏殷周三代以来の聖賢や英雄が「仙」となって暮らしているという信仰を持ち、それを墓の画像に示した。それによって、現世の人々に儒家としての崇高な未来志向をもたらしたのである。

このような儒生のあり方は、漢代以前の儒家とは違う。漢の儒家は、生前に忠・孝・節・義といった「徳」をつとめておこなう「力」を持った者が、死後に仙になるという規範を考えだした。『春秋左氏伝』隠公十一年に「徳を度(はか)って処し、力を量(はか)って行なう」とあり、これが彼らのいう「『春秋』の大義」なのである。こうした儒教は、董仲舒らの「儒術独尊」の努力を経て、前漢末までには、神仙・方術・災異思想と融合し、経義を付会した讖緯により基礎づけられた。これは、儒家の社会的理想、黄老道、死後に昇仙するという仙鬼信仰とが結合された結果である。

この結合は、漢以前の諸子のあり方とも違う。矛盾にも似たこの思想的現象は、どうして起こったのか。長期の混乱を経て、国家が大一統していく時代、「徳」と「力」が必要とされた現実社会の要求に駆られて起こったのである。漢鬼の信仰により、衆人は心を地下世界に委ね、死と生を同一視できた。こうした信心が「漢・唐の「軍心」「忠心」の精神構造において内在的な支柱作用を果たした」、つまり「中国」が世界史的な大帝国を築きあげた人的なパワーの源だった、というのである。

以上の観点を証明、分析する資料は、おのずと墓葬の建築や画像や埋葬品ということになる。従来の研究では、これらの視覚材料を一つ一つ個別に検討してきたが、本書ではそれらを「煉形の宮」における儀礼過程に位置づけなおし、全体のなかでの機能を検討する。したがって、一見すると死の問題と関連しないような画像などでも、それは「煉形の宮」における役割から解釈され、従来の解釈に変更を迫る。例えば、孔子と老子の会見図が後漢の墓には多く見られる。これについて従来の議論は汗牛充棟だが、二人とも歴史的存在ないし山東のローカルな伝承として議論されるのが普通であった。しかし本書によれば、孔子も老子も当時すでに讖緯において神格化されており、老子は孔子の師であるだけでなく、歴代の聖者の師となっていた。その聖者たちは、今や死後の「仙」となっている。孔子が多くの弟子を伴って老子に拝謁する画像があるのは、墓主を「仙」となった聖賢の友として扱い、聖賢やその弟子たちとともに老子に拝謁するかたちをとることで、死後に「仙」に選ばれる道を暗示している、と解釈できるのである。

これは思想から視覚材料を解読しているが、画像によって

文献が解釈しなおされる場合もある。例えば、『搜神記』にみえる韓憑夫婦と宋康王の物語は、著者が独自に入手した画像石の写真（実物は個人蔵らしい）による研究で、新たに解釈しなおされている（二八〇頁）。このように、本書における画像の読解は、前人の研究成果の参照と文献の博引旁証によって、極めて周到になされている。それだけでなく、漢鬼の思想にもとづくマクロな観点からのダイナミックな解釈が醍醐味である。つまり、画像と文献の相互参照、その解釈の結果と漢鬼の思想の相互参照という三点の相互参照により、膨大な画像資料と文献がつぎつぎに結びつけられていく。

とはいえ、画像と文献が矛盾したり、画像を解釈する文献が見いだせなかったりした場合はどうするのか。その場合は図像の信ぴょう性を優先するのである。言われてみればその通りなのだが、文献は二〇〇〇年近くも伝来したもので、途中、人工的な改変もあるのに対し、墓葬の画像は当時のそのままである。ここでも発想転換が必要で、文献至上主義を反省しなければならない。その一方で、画像によって文献が古い成分を伝えていることを証明できる場合もある。例えば、『元始上真衆仙記』などの道教経典には、漢墓の画像と一致する記述があり、とくに上清派道教の道士とされる梁の陶弘景編の『真誥』を本書では重視している。同じ陶弘景の『真霊位業図』では、孔子や顔回など、およそ上清派道教とは縁のなさそうな聖賢が、真霊として確固とした位置にいる。この件は、前々から妙だなと思っていたので、漢墓の画像との相互参照により腑に落ちた。ここでの発想転換は、新しい成立の文献から古い事象の証拠を求める手法で、普通は認めら

□新刊□

日本語と中国語の副詞

日中対照言語学会　副詞に関する研究論文11篇を収録。■2800円

鈴木泰／早津恵美子／李丹／呂雷寧・郭雅菲／時衛国／小路口ゆみ／高橋弥守彦／王学群／鄭玉貴／孫宇雷／藤田昌志（掲載順）

韓国漢文愛情伝記小説

周生伝・憑虚子訪花録・崔陟伝・相思洞記・王郎返魂伝

日向一雅 編
金孝珍・千葉仁美・朴知恵・金李興淑・金木利憲・太田陽介 訳注
野崎充彦 解説

朝鮮時代に書かれた漢文小説の中から愛情をテーマにした伝奇小説5作品を邦訳。これらは中国の唐代伝奇の系譜に連なる古典的伝統的な作品であり、16～18世紀の愛情伝奇小説を代表する作品である。原文に訓読文と詳細な語釈・注釈を付す。■3200円

白帝社　※価格は税別
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

れないが、その信ぴょう性が漢墓の画像により担保されているのである。

こう述べてくると、本書の議論は博引と饒舌でさも騒がしいようだが、姜生氏の読解の根本にあるのは、ドイツの解釈学者にも似た一種の静けさ、「古人の心を知ること」、古人の身になって考えることである。私からすると、考証や客観主義を装うのに汲々とせず、あなたも墓室に横たわってみなさい、と言われているように感じる。暗いレンガ造りの墓室で目と耳を凝らせば、冷たい壁面の向こうから古代の喧騒と熱い激情が浮かび上がってくる、と。

最後は、原題になかった日本語訳の副題「道教の勃興」である。実はこの副題にいう「道教」が本書の結論である。中軸で滔々と述べられた漢鬼の思想、漢代宗教の信仰構造は、漢帝国の衰亡で消えたわけではない。「道教」というかたちで安定的に存在し、「華夏文明」に滋養を与えつづけていった。張道陵で代表される漢末の「道教」の儀式システムは、漢の体制の模倣であり、こうした宗教儀礼における官僚体制化は、漢帝国の継承なのである。「初期天師道と両漢の宗教とは一脈相伝の関係にあり、それらが内包しているものはすべて、漢帝国に由来する大一統国家の倫理意識と精神に基づいている」、「「道教」の魂は「漢鬼」の魂であり、「道教」の儀礼は漢墓の儀礼であり、「道教」の理想は漢帝国の理想なのだ」（六四五頁）。

本稿冒頭で紹介した「漢鬼は幸せだった」という言葉から、漢鬼に対する姜生氏のある種の尊重というか、あこがれが感じられる。彼から見ると、漢鬼のハッピーは、研究対象というだけでなく、尊ぶべき「徳」と「力」の根源でもあったようだ。漢の儒生のように人生の意味を追求し、民間に身を置いて思想と信仰を追求する激情に満ちた姜生氏の姿を思い出す。本書は、彼にとっての「徳と力のある中国」に贈る賛歌だとも言えるだろう。

【付記】本稿は、本書に付された三浦國雄氏の解説を読むまえに書いたため、重なる部分がある。読者諸氏は、三浦氏の周到な解説に依られたい。その解説で指摘される「太陰煉形」の場としての墓室、およびその語の由来である『老子想爾注』の問題について、三浦氏には専論「墓室から洞天へ」『洞天福地研究』第9号（二〇一九年）がある。また、すでに菅野恵美氏による原書の書評が『東方』四四〇号（二〇一七年）にある。

（つちや・まさあき　専修大学）